

トピックス…③ 交雑種初生牛高騰の影響

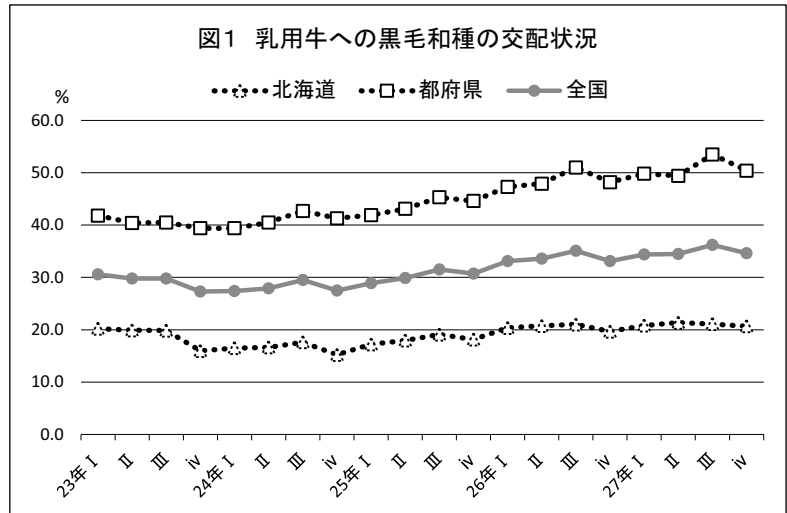
わが国における乳用牛への黒毛和種の交配割合は、平成25年第Ⅲ四半期に30%を上回り、最近では35%前後で推移している。その背景には、肥育用素牛、とくに和牛子牛の取引価格の高騰に伴う交雑種市場での代替需要の拡大があり、これは交雑種初生牛の取引価格の上昇ばかりではなく、乳用後継牛の需給ひっ迫の一因とも言われている。

黒毛和種交配率の上昇

家畜改良事業団が提供する牛個体識別情報の「牛の種別・性別・月齢別の飼養頭数」によると、平成28年3月末における1か月齢未満の牛飼養頭数は47,487頭で、そのうち黒毛和種が12,656頭、交雑種が10,793頭となっている。交雑種が全体に占める割合は22.7%であるが、黒毛和種の頭数には受精卵移植牛、つまり乳用種に「借り腹」して生まれた子牛も含まれており、肥育用素牛生産における酪農の果たす役割は年々大きくなっていると言えよう。換言すれば、肥育用素牛、とくに和牛子牛の供給が不足しているために、乳用種と黒毛和種の交配による交雑種の生産が拡大しているのである。

このことは、乳用牛への黒毛和種の交配状況

をみると明らかである（図1参照）。日本家畜人工授精師協会によると、平成25年第Ⅲ四半期以降、乳用牛への黒毛和種の交配割合は30%以上で推移している。とくに都府県における黒毛和種の交配率は、北海道の2倍以上の高水準で推移してきたが、平成27年第Ⅲ四半期に53.5%に達し、その後も50%を上回っている。

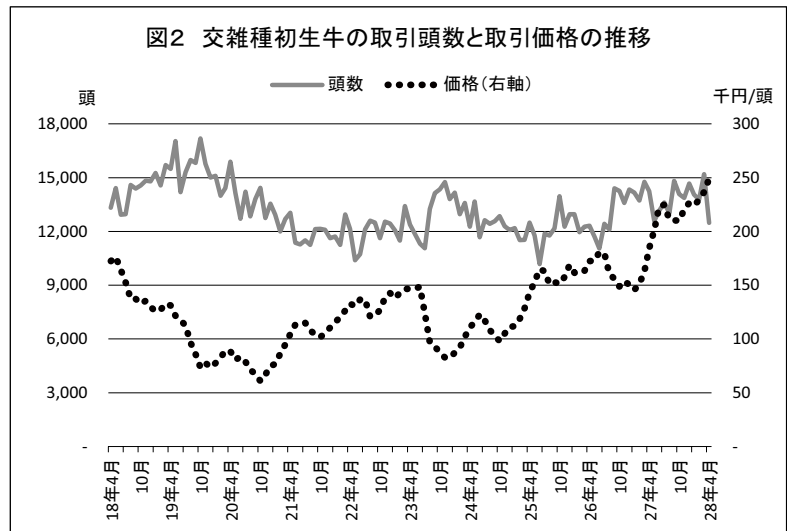


資料：(一社)日本家畜人工授精師協会

注)平成27年第Ⅳ四半期は中間集計結果である。

乳用後継牛の需給ひっ迫

直近の10年における交雑種初生牛の取引頭数と取引価格の間には、概ね相反する動きがみられる。つまり、取引頭数の増加（減少）局面では取引価格が下降（上昇）する傾向がみられる。しかし、長期的には、取引頭数は増減を繰り返しながら緩やかな増加傾向にあり、取引価格は著しい上昇傾向にある。その結果、平成27年1月以降、上昇傾向で推移してきた交雑種初生牛の市場取引価格は、同年5月に20万円台に達し、本年4月には25万円近くまで高騰した（図2参照）。



資料：(独)農畜産業振興機構調べ

さらに、交雑種初生牛と乳用種初妊牛の市場取引価格の動きにも強い関係がみられる。

周知のように、乳用種初妊牛の市場取引価格は、春分娩牛が出回り始める12月に上昇を始め、翌年の春にピークを迎え、その後下降に転じるという変化を毎年繰り返してきた。しかし、このパターンに変化が表れている。

平成26年の春以降、上昇傾向にあった乳用種初妊牛の市場取引価格（ホクレン市場）は、平成27年9月に60万円に達し、以降も上昇を続け本年1月に70万円を上回った。しかも、市場関係者によると、夏分娩牛が中心となる5月になっても、取引価格の極端な値下がりが見られないという。交雑種初生牛の市場取引価格が高水準で推移する状況の下、交雑種を分娩する予定の乳用種、いわゆる「F1腹」の需要が依然として大きいことが一因と言われている。この「F1腹」の旺盛な需要が、乳用種初妊牛の市場取引価格を下支えしているのである。